

宮沢賢治「ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記」 と夢野久作『ドグラ・マグラ』の比較研究：ヘッケ ル、名刺、銀時計

頼, 怡真
九州大学大学院比較社会文化学府：博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/1456069>

出版情報：九大日文. 22, pp.2-24, 2013-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

宮沢賢治「ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記」と夢野久作『ドグラ・マグラ』の比較研究

——ヘッケル、名刺、銀時計——

LAI
Yichen
賴 怡真

一、大正生命主義の思潮

明治四〇年前後から「生命」という語が氾濫する。一九一〇年代を通じて、「生命」と名のつく書物が大量に出版されており、一九一〇年代は「生命論」の時代であった。また、鈴木貞美は、「デモクラシーや教養主義、文化主義、享樂主義、生命主義、デカダンス、階級闘争といったものがすでに大正期に対する既存のイメージだった」^①と指摘している。そして、エルエンスト・ヘッケル (Ernst Heinrich Haeckel, 1834-1919) の『宇宙の謎』(Die Weltrhase, 1899) の結論において「時勢は変じ、旧いものは壊れた／そして其廃墟の上に、新しい生命が明け始めた」とあるように、一九一〇年代はまた、詩人達がそろって光明体験、新生体験を描いた「大正生命主義」の時代であった^②。詩集『春と修羅』(關根書店、大正二年四月二〇日)所収の「屈折率」において、「七つ森のこつちのひとつが／水の中よりもつと明るく／そしてたいへん巨きいのに／わたくしはでこぼこ凍つた

みちをふみ」と歌う宮沢賢治もまた、その光明体験を描いた詩人の一人であった。大正生命主義の思潮は、たとえば、自然科学と宗教、自然征服感とアニミズム、生存闘争と共生感、エゴイズムと全体主義などといった形で、さまざまな様相を呈して展開されてきたが、賢治の生命観には、特にアンリールイ・ベルクソン (Henri-Louis Bergson, 1859-1941) の「差異と反復」(異質的な連続性)の思想やヘッケルの「個体発生論」の受容が見受けられる。主に童話「ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記」(大正一〇、一一年に成立、以降「ネネムの伝記」と略記)においては、ヘッケルの学説を想起させるような描写が散見されるのだが、「ネネムの伝記」が完成するまでには、幾度もの改稿が重ねられて昭和七年「児童文学」第二冊(佐藤一英編集、文教書院)に「グスコーブドリの伝記」が発表されるまでの、実に一〇年近くの歳月が費やされていた。奇しくも昭和一〇年一月に発表された夢野久作『ドグラ・マグラ』(松柏館書店)もまた、大正一五年から構想が練られ、同じ一〇年の歳月を費やして書き上げられた大作であった。この小説の中に挿入されている、精神医学を専門とする正木敬之博士による「脳髓は物を考えるところに非ず」という新聞記事や論文『胎児の夢』が、ヘッケルの反復説を下敷きにしたものだということは、既に多くの先行研究で指摘されている。養老孟司が、「著者は、「胎児の夢」なる論考の中で、進化と発生の問題を同じように決定しようとする。著者が徹底的なヘッケル主義者、つまり文字通り忠実に、「個体発生は系統発生を繰り返す」ことを信じている」^③と指摘しているよう

に、正木博士の論文を通して、ヘッケルの反復説が展開されている。正木博士の論文で主張される一方向性の進化論の論点及び、作品の中心テーマである逆流する「時間」の矛盾点は、『ドグラ・マグラ』の真骨頂を成す難問である。

大正生命主義が高潮するにあたって、生命の意義や自我の探究が主なテーマになり、自己同一性の問題、つまり「自分とは何ぞや」といったテーマが描かれた小説も数多く登場した。宮沢賢治の「ネネムの伝記」およびその後の改作『グスコンプドリの伝記』や『グスコンプドリの伝記』、その改作のための草稿⁽⁴⁾は通常、「伝記群」と呼ばれているが、この一連の改作を一つの巨大な作品として見なす時には、重要なテーマが一つ浮かんでくることがわかる。山田兼士は、「グスコンプドリの伝記」は最初「ベンネンブドリの伝記」と題されていた。『父』(ベンネン)と『子』(ブドリ)の再統合を夢見た一瞬が、おそらくここにあったのだ。遺された作品ではついに二人は全面的に交感し合うことはなかったが、少なくともベンネンが「首を垂れ」た沈黙の瞬間に、ひそかに『父』と『子』の和解は成立していたのだ⁽⁵⁾と述べている。また押野武志は、「ネネムの伝記」は「自己と他者が未分化な世界、自他が連続している世界を表象している」が、後継作品の『グスコンプドリの伝記』においては、主人公が「自他の連続性が確保されていない世界に生まれ」、「アイデンティティの確立を迫られ」るが、「この黙劇は「グスコンプドリの伝記」においては、自分が自分であることがもはや自明な地点にたどり着いている」⁽⁶⁾と指摘している。先行

研究では、このように「伝記群」における主人公のアイデンティティの問題について論証が行われてきたのだった。

一方、『ドグラ・マグラ』においては、主人公の「わたし」が、自分が呉一郎であり呉青秀の後裔であることを想起する場面が登場しながらも、主人公はなお自分が呉一郎であることを拒み続ける。鶴見俊輔は『ドグラ・マグラ』は、自分をさがす探偵小説である。主人公は、狂人で、自分の名前を知らず、自分が誰であるかを知らない⁽⁷⁾と評し、また、由良君美は『ドグラ・マグラ』は「自己確認」の小説である——それも、自己確認がついに不能となる時点の、執拗な探究の小説である⁽⁸⁾と指摘している。また、新木安利は「状況証拠は全て彼が一郎であることを指し示しているが、彼はまた自分自身に自分一郎であることを思い出していない」⁽⁹⁾と、「自分が誰であるか(アイデンティティ)を同定していない」一郎による「夢中遊行の自己探偵(自己言及)」が成立しがたいということを指摘する⁽¹⁰⁾。この中で、鶴見は久作の『ドグラ・マグラ』と『犬神博士』(昭和六年九月三日〜昭和七年一月二六日まで「福岡日日新聞」上に連載され、未完、「水の涯」(「新青年」一四二号第三巻、昭和八年二月)の三作品が共通して「徹底的唯名論」の作品であることを示し、「五、六歳の少年(犬神博士、国籍リダツ者(水の涯)、狂人(ドグラ・マグラ)による犯罪のナゾトキの過程を描く。社会から規定されている自分の状態からぬけだす人の立場、社会から、まだ自分を規定されていない者の立場が推理の軸になっている」⁽¹¹⁾と指摘している。本稿においては、大正生命主義の時代の真つ只

中に、宮沢賢治「伝記群」(主に「ネネムの伝記」)及び夢野久作『ドグラ・マグラ』というアイデンティティの問題をテーマにするこの二つの作品において、自己認識に対する齟齬や懷疑がどのようにして描かれているのかを見てみたい。

二、日本におけるヘッケルの受容

本題に入る前に、まず「ネネムの伝記」および『ドグラ・マグラ』において、ヘッケルの個体発生論がどのように受容され、描かれているかについて確認したい。「ネネムの伝記」における「この世界が、はじめ一疋のみちんこから、だんだん枝がついたり、足が出来たりして発達しはじめて以来、こんな名判官は実にはじめてだ」(『校本 第七巻』三一九頁)という進化的な描写を思想的なコンテクストで考えた場合、ここにはエルンスト・ヘッケルの「個体発生論」及び「反復説」の受容があると考えられる。ヘッケルは一八六六(慶応元)年に『有機体の一般形態学』を発表し、「最終的には生物の一本の系統樹に統一される進化の途中の段階にある」と述べ、「生物の多様性は一本のつながりを持ち、単純で基本的な原始の形まで追跡してさかのぼることができる」⁽²⁾と論じている。「ネネムの伝記」における「この世界が、はじめ一疋のみちんこから、だんだん枝がついたり、足が出来たりして発達」するという描写はまさに、ヘッケルの動物系統樹の概念との類似を見せている。

また、ヘッケルは「すべての『より完全な有機的自然』、す

なわちすべての脊椎動物は、一つの共通の根本形成物(Grundform)に由来し、この根本形成物からこれらの動物は、生殖(遺伝)と変形(適応)によって生じた」⁽³⁾と述べている。また、最初の生物モネラ(単細胞)から二六段階で人類に達するというヘッケルの説について、小野隆祥は賢治が詩篇「小岩井農場」で「漸移のなかのさまざま過程」と呼ぶ時、ヘッケルのこの段階説が具体的なモデルとして想念されていたことを指摘している。⁽⁴⁾

「ネネムの伝記」の後には次の改作の試みとして「ペンネノルデ」を主人公とする箇条書きのメモが残されたが、小野によつて既に指摘されているように、ここに登場する町の名前「モネラ」がヘッケルの説で言うところの人間にいたる二六階段の最初の生物の名前に由来するものであることがわかる。

宮沢賢治を含む、明治・大正期の知識人の間で読まれた進論についての啓蒙書としては、生物学研究の第一人者であった丘浅次郎の『進化論講話』(東京開成館、明治三十七年一月七日)を挙げる事ができよう。『進化論講話』は二〇章から成り、その第一章「ダーウィン以後の進化論」ではハックスレー、ヘッケル、ウォーレス、ヴァイスマン、ローマネス、ヘルトヴィツヒなどについての説明が書かれてある。丘の進化論観は、ヘッケルに同調したもので、その一元論的思想はチャールズ・ダーウィン(Charles Robert Darwin, 1809-1882)を踏襲したものである。ダーウィンの『種の起源』(On the Origin of Species, 1859)は、明治二九年に、文学士、立花鉄三郎によつて初めて翻訳され、『生物始源 一名種源論』と題して刊行された。丘は明治三八年に

『種之起原』を校訂し、それは「生存競争適者生存の原理」の副題がつけられて東京開成館から刊行された⁽⁴⁵⁾。賢治の蔵書には、石川三四郎『非進化論と人生』やヘッケル『Die Lebenswunder』⁽⁴⁶⁾（明治三十七年、『宇宙の謎』の補足版として出版）、*"Was ist Wahrheit?"*（「真理とは何ぞい」）などのドイツ語の原書があることがわかっている⁽⁴⁶⁾。また小野隆祥は、賢治が大正二年の秋に丘の『進化論講話』とヘッケルの『生命の不可思議』を熱心に読んでいたと指摘している⁽⁴⁷⁾。久作の『ドグラ・マグラ』においても、「ダーウインの『種の起原』⁽⁴⁸⁾についての言及がある。そして賢治「詩ノート」の「生徒諸君に寄せる」においては次のように歌われている。

新しい時代のコペルニクスよ

余りに重苦しい重力の法則から

この銀河系統を解き放て

新しい時代のダーウキンよ

更に東洋風静観のキャンレンジャーに載って

銀河系空間の外に至って

更にも透明に深く正しい地史と

増訂された生物学をわれらに示せ（『校本 第六巻』二一〇頁）

ここにおける「コペルニクス」とは、従来の常識であった地球中心説に対して太陽中心説を唱えた天文学者ニコラウス・コ

ペルニクス (Nicolaus Copernicus, 1473-1543) を指したものであるという可能性もあるが、「ネネムの伝記」における「ばけもの律」がイマヌエル・カント (Immanuel Kant, 1724-1804) の道徳律に由来していること⁽⁴⁹⁾から、カントのコペルニクスの転回を意味している可能性もある。また、次の連で歌われる「新しい時代のダーウキンよ」という詩句を踏まえると、賢治に進化論の深い受容があったことは疑いようがないのである。

三、「ドグラ・マグラ」と「ネネムの伝記」におけるヘッケルの「**個体発生**」説の受容

「ネネムの伝記」において、ヘッケルの受容の一端として指摘できるのは、ヘッケルの「**反復説**」を思わせるような描写である。ネネムが世界裁判長になって始めて行う町の巡視の様子は、以下のようになっている。

ばけもの世界のヘンムンムンムンムン・ムムネ市の盛んなことは、今日とて少しも変りませぬ。億百万のばけものどもは、通り過ぎ通りかゝり、行きあひ行き過ぎ、殖生し消滅し、聯合し融合し、再現し進行し、それはそれは、実にどうも見事なんです。（『校本 第七巻』三一頁）

右の引用では、ヘッケルの、「**個体発生は系統発生の短い反復 (Rekapitulation)**」にほかならない⁽⁵⁰⁾という反復説の受容がある

と同時に、ベルクソンの「連続的で異質的な持続」の思想が背景にあると考えられる。右の引用での「発生し消滅し」という箇所が、ヘッケルが『生命の不可思議』において、習慣をとおしての人類の進化を説いている一節を想起させる。

吾々は、ラマルクの成來說を通じて初めて其意義を十分に理解することを得るのである。習慣は、一つの生理的行為を度々反復して成立するものであつて、本來蓄積的或は機能的の適應に他ならぬ。原形質の記憶と密接の關係ある同一の行為を度々反復すれば、これによつて必ず積極的或は消極的現象が生ずる。即ち消極的には、或る器官が使用によつて**發達**し、或は強めらるゝことであり、消極的には此器官が使用を廢した為に萎縮し、或は弱められることである。此些細な變化が漸次蓄積すると、長い間には遂に適應の結果、進歩的變化によつて新器官が**發生**し、又はその反對に退行的變形によつて、實際の器官が不要となり、萎縮して遂に**消滅**するのである。(ヘッケル「道德」(栗原元吉訳『生命の不可思議』玄黄社、大正七年五月)五五三―五五四頁)

ヘッケルはダーウインの二元論を踏襲しながらも、その適者生存論を援用するのではなく、ジャン＝バティスト・ラマルク(Jean-Baptiste Pierre Antoine de Monet Chevalier de Lamarck, 1744-1829)の生物の器官の「用不用」についての説に近い論点を唱えている。また、既に養老孟司が指摘しているように、ヘッケルの反復説

は夢野久作の『ドグラ・マグラ』においても受容されている。この小説には、ヘッケルの反復説を下敷きにした箇所として次のような一節がある。

その証拠に見たまへ……諸君の眼の前で、今の元始細胞が盛んに自己を分裂増大して、その形態と能力をグングン進化させ初めたではないか。その靈能でもってみるみるうちに成長し、分裂し、結合し、反射交感して、一心同体となつて共鳴、活躍しつづ、自分達の共産的靈能をあくまでも地上に發揮すべく、しだいに高等複雑な姿に進化し始めたではないか。さうして……(三四三頁)[※]

先に引用した賢治の「ネネムの伝記」と極めてよく似た描写を通して、ヘッケルの反復説が再現されていることがわかる。そしてこの「共産的靈能」という箇所については、「赤い主義者は、その黨員の一人一人を細胞と呼んでいる」(三四一頁)という箇所と合わせて読んでみると、ここには言うまでもなくマルクス主義の影響があることがわかる。⁶⁾賢治にマルクス主義の影響があったことは詩篇、童話を通して容易に指摘できるが、右の引用箇所ではヘッケルの個体反復説に見事にマルクス主義的な色彩が取り入れられていることがわかる。

ヘッケルの論説が二人に与えた影響はこれだけではない。『ドグラ・マグラ』において正木博士が書いた『脳髓論』の中で、「脳髓は一種の電話交換局にすぎない」(二三六頁)とあるが、

これもまたヘッケルの「筋肉は運動を致し、三神経は特設の中心機關即ち腦若しくは神經節により前二者の間の接續を為す。此の神經機關の裝置と作用とは從來電信の組織に比せられたり。即ち神經は電信なり。腦は中央局なり。而して筋肉及び感覺機關は即ち支局なり」という『宇宙の謎』の一節を踏まえた言及であろう。

また、「脳髓は一種の電話交換局にすぎない」という一文は、賢治の『春と修羅』の「序」で歌われている「わたくしといふ現象は／仮定された有機交流電燈の／ひとつの青い照明です」（『校本 第二巻』五頁）という箇所と対応している。そして作品が変わるが、賢治の言う「わたくし」という現象については、「詩ノート」（第一〇一八番）で、「黒と白との細胞のあらゆる順序をつくり／それをばその細胞がその細胞自身として感じてゐて／それが意識の流れであり／その細胞がまた多くの電子系順列からできてゐるので／畢竟わたくしとはわたくし自身が／わたくしとして感ずる電子系のある系統を云ふものである」⁽²³⁾と書かれている。この中の「その細胞がその細胞自身として感じてゐて／それが意識の流れであ」という箇所は、正木博士の『脳髓論』の内容と同工異曲となっている。そして賢治の詩に歌われている「電子系」というのは、ヘッケルの唱えている「エネルギー不滅の法則」（「無限の宇宙に充滿せる物質の總量は不變なり」）の「エネルギー」の訳語である。賢治が用いている「電子」という語は、例えば、「ネネムの伝記」における「奇術第一座」の演目の一つである「電気闘争」や、童話「ボラーノの広場」

（大正一三年、生前未発表）や「銀河鉄道の夜」において少年ミロが歌う曲の中に登場する「電気栗鼠」などの場合のように、頻繁に用いられている言葉である。

四、「ネネムの伝記」および『ドグラ・マグラ』における反復

四―一、「ネネムの伝記」における反復

ヘッケルがその反復説において「個体発生は系統発生の短い反復 (Recapitulation) にほかならない」と説いたように、「ネネムの伝記」の内部においても、絶えず反復が発生している。主人公の名前「ペンネンネンネン・ネネム」や裁判にかけられる被疑者の一人の名前「ウウウウエイ」、町の名前「ヘンムンムンムン・ムムネ市」、ばけもの世界の警察長の名前「ケンケンケンケンケン・クエク」。このように、絶えず同じ音声が重複する名前が登場する。そして第三章「ペンネンネンネンネン・ネネムの巡視」に登場する、百年も二百年前の因縁によって毎日のように繰り返して起きている借金連鎖のエピソードにおいてもやはり、反復の運動が見られる。そして作品の内部だけではなく、作品と作品の間でも「反復」が繰り返されている。主人公の違うのエピソードが「伝記群」をとおして何度も繰り返し登場しているのである。

「ネネムの伝記」においては、ネネムが町に向かう途中、百姓のおかみさんから、その行方不明になった息子に間違えられ

る場面がある。ネネムが、それが人違いであることを説明すると、「うちのせがれも丁度あなたと同じ年ころでした。まあ、お髪くしのぢれ工合から、お耳のキラキラする工合、何から何までそっくりです」(『校本第七巻』三〇三頁)とおかみさんが言う。人違いのエピソードは、改稿「グスコンブドリの伝記」にも登場しており、主人公のグスコンブドリが汽車に乗ると、「うしろから誰か肩を叩くものがあり」(『校本第十巻』四四頁、それを振り向いて見てみると、「ヒームキアのネネムではないか」と言われる。グスコンが何のことかわからずに狼狽していると、「なんだ、きみはヒームキアのネネムではないのか。」と言われ、そして「わたしはきみを山案内人のネネムと間ちがへたんだ。うしろかたちがあんまりそっくりだったもんだからね。」(『校本第十巻』四四頁)という言葉が続く。

「グスコンブドリの伝記」においては、主人公が先行作品の主人公の造形と似ていることをおとして、主人公の造形が「反復」される。主人公が人違いをされるというエピソードが挿入されることよつて更に作品と作品の間における主人公の反復が証明されている。しかし、「伝記群」に描かれている人違いのエピソードにおいては、主人公が「ははあ、これはきつと人ちがひだと気がつ」(『校本第七巻』三〇三頁)くように、主人公が先行作品の主人公の転生であることが暗示させながらも、主人公の「きつと人ちがひだ」という一言でその関係性が否定され、主人公の自己の確認に断絶が生じるのである。

四―二、『ドグラ・マグラ』における反復

一方、久作『ドグラ・マグラ』においては、「ネネムの伝記」と同じように、小説の題名『ドグラ・マグラ』⁽²⁵⁾自体が同じ音を反復したようになっており、小説の冒頭部及び結末部では、「……ブウウー——ン——ン——ン……」という音が一貫して繰返されている。また、この小説では登場人物の名前や語句の反復が多く散見される。たとえば若林鏡太郎博士と正木敬之博士の頭文字の「M」と「W」の反復もそうであるが、「鏡太郎」の名前にある「鏡」という字自体も、彼が正木博士の分身であることを示唆している。ちなみに、主人公が「僕が一番好きなのは語学ですが、そのうちでも一番面白いのは外国の小説を読むことで、特にそのうちでもポーと、スチブンソンと、ホーソンが好きです」(四八五頁)と言っているが、ポー (Edgar Allan Poe, 1809-1849) の「ウィリアム・ウィルソン」(“William Wilson,” 1839) においては「W」と「W」の分身が登場したり、ステイブソン (Robert Louis Balfour Stevenson, 1850-1894) の『ジキル博士とハイド氏』(Dr. Jekyll and Mr. Hyde, 1886) においても二重人格の人物が登場したりする。そのほか、若林が主人公に名づけた「アンポントン・ポカン博士」というあだ名や、「キチガイ地獄外道祭文」の作歌者の「面黒楼万児」というペンネーム、「キチガイ地獄外道祭文」全体において段落ごとに繰返されている「スチヤラカ、チャカポコ。チャチャラカ、チャカポコ……」という経文など、どの言葉にも音律の反復が見られる。また、「正木

先生はあの翌日に亡くなられたのです……しかも、ちょうど一年前に、斎藤先生が溺死を遂げられた、管崎水族館の裏の同じところで、投身自殺をされた」(二七二頁)とあるように、正木博士とその師である斎藤寿八教授の死亡日及び死亡場所が反復されている。そして作品内部において行われている最もスケールの大きい反復は、恐らく正木博士の論文『胎児の夢』及びその実験台となった呉一郎一家の歴史の反復であろう。

正木博士の『胎児の夢』における「すなはちその人間の細胞の一粒一粒の中に平等に含まれている、その人間の個性とか、特徴とかいうものは、吾輩の実験によると一つ残らず、その人間が先祖代々から遺伝して来た、心理作用の集積に外ならない」(三五四頁)と言う時の「細胞の記憶力」や細胞は遺伝するという論理はヘッケルの「両親の心的特質は遺傳する」⁽²⁶⁾という論調と呼応している。ヘッケルはカントの二元論的な認識に対して、われわれ人間が個々の経験に先立ってア priori 的な判断が可能なのは「連綿と続く霊長類の祖先から受け継いだ」脳の器官と、われわれの知覚器官のせいである」⁽²⁷⁾と述べている。両親の結合によって、細胞精神も遺傳するというヘッケルの学説は、『ドグラ・マグラ』の呉一郎が千年前の呉青秀であり、また従妹の呉モヨ子が呉青秀の妻、黛婦人と双生児の妹の芬夫人二人の生き写し⁽²⁸⁾であることをとおして示される。

五、名刺とアイデンティティの問題

五―一、自己同一性の拒絶——「わたし」≠呉一郎

『ドグラ・マグラ』では主人公の「わたし」が読む書類の内容と物語が同時に進行するため、複雑かつ難解なテクストになっている。以下にその構成を簡単に説明する。「わたし」はある部屋(七号室)で目覚める。隣の部屋からは知らない女の悲鳴が聞こえ、主人公は怯え、その後眠りに落ちて再度、眼が覚め、若林博士と対面する。若林をとおして従妹で許嫁の呉モヨ子と対面させられる。自分が何者であるかを思い出すようにと、若林に九州帝国大学医学部精神科本館に連れて行かれる。「わたし」はそこで『ドグラ・マグラ』という小説を発見するが、読むのを途中でやめてしまう。そして、斎藤博士と正木博士が変死したいきさつが説明された後、正木博士の「動かすべからざる計画」(二七三頁)について書かれた赤いカバーの書類を渡され、「わたし」が「無我夢中に読み続け」(二七六頁)た書類のテクストが挿入されながら物語が進行する。挿入された書類は以下のとおりである。

1、『キチガイ地獄外道祭文』(二七七〜三〇八頁)(最後に「黒楼万児苑」の葉書がある。)

2、『地球表面上は狂人の一大解放治療場』(三〇九〜三一四頁)(新聞の切抜き記事である。)

3、『絶対探偵小説／脳髓は物を考える処に非らず』——正木博士の学位論文内容』(三一五〜三六一頁)(アンボンタ

ン・ボカン君（正木が主人公に付けたあだ名）の街頭演説を取材した新聞記事。文の最後に「文責任記者」という署名がある。）

4、『胎児の夢』という論文（三六二〜三八九頁）

5、『空前絶後の遺言書』——大正十五年十月十九日夜（三九〇〜五六九頁）（キチガイ博士記の署名がある。）

五つの書類を読み終わった「わたし」には「どうだ……読んできましたか」（五六九頁）という声が聞こえてきて、今まで読んでいた遺言書を書いた本人である正木博士が目の前に現われたので「わたし」は驚く。また、その時から若林が登場しなくなる。正木博士は自分が自殺したのはすべて若林博士の「ペテン」のせいであると説明する。また、そこで「わたし」は自分が「呉一郎」であることに気づいて、混乱する。以下は「わたし」が「呉一郎」かもしれないと思った時の描写である。

けれども……その心臓と肺臓がイクラ騒ぎ立てて、喘ぎまわっても、私の魂はどうしても、呉一郎としての過去の思い出を喚び起しえなかった。そのあいだに何遍頭の中で繰り返したか知れない「呉一郎」という名前に対して、「これが自分の名前だ」というような懐かし味や親しみが微塵ほど感ぜられなかった。私の過去の記憶はイクラ考え直しても、今朝暗いうちに聞いた「ブーン」という音のところまで遡って来ると、ソレッキリ行き話まりになってしまったのであった。……私は他人が何と思おうとも……どんな証

拠を見せつけられようとも、自分自身を呉一郎と認めることができないのであった。（五七五頁）

「わたし」は、その書類のどれもが自分が「呉一郎」であることを示しているが、どうしても自分自身が「呉一郎」であるとは思えない。そもそも、冒頭で「わたし」が目覚めた部屋については、「ゴシック式の黒い文字で「精、東、第一病棟」と小さく、「第七号室」とその下に大きく書いてある。患者の名札はない」（二〇二頁）とあり、また「呉一郎」が正木の自殺後に一週間で仕上げた小説『ドグラ・マグラ』についても「その次の頁に黒いインキのゴシック体で『ドグラ・マグラ』と表題が書いているが、作者の名前はない」（二三〇頁）とある。書類のすべてが、「わたし」が「呉一郎」であることを証明する一方で、『ドグラ・マグラ』のテクストの細部には、あえて「患者の名札がない」「作者の名前はない」というように名前が伏せられている箇所がある。また、「わたし」は「呉一郎」という名前に反応を見せないが、一方で「わたし」が自分の父親の可能性がある若林博士の名前が書かれてある名刺を見て驚く場面がある。「驚かすにはいられようか。わたしは今朝から、まるで自分の名前の幽霊に付きまといわれているようなものではないか」（二七四〜二七六頁）とあるように、主人公は「九州帝国大学法医学教授／医学部長／若林鏡太郎」と書いてある名刺を見て、それが「自分の名前の幽霊」だと感じてしまう。

このように自分が「呉一郎」なのではないかというアイデン

テイテイの不安を描いた場面が小説の内部で絶えず登場している。さらにもう一つの例を挙げてみよう。「わたし」は狂人解放治療場で、自分と瓜二つの呉一郎を見つけた瞬間に、頭の痛みを感じ始める。それについて、正木博士は呉一郎は昨夜、「その心理遺伝の終極点まで発揮しつくして、壁に頭を打ちつけ、自殺を企てた」(六〇五頁)と説明する。それを受け「わたし」

は今朝から理髪師や看護婦に頭を掻きまわされても、なんとも感じなかったのに、何故今頃になって、頭が痛くなるのだろうかと尋ね、正木博士が「なんべん引つ掻きまわしていたつて、おなじことだよ。自分が呉一郎と全然無関係な、赤の他人だと思つている間は、その痛みを感じないが、一度、呉一郎の姿と自分の姿が生き写したということがわかると、その痛みを突然に思い出す」(六〇五頁)と言ひ、「君自身には赤の他人としか思えない呉一郎の頭の痛みが、いかなる精神科学の作用で、君自身の顛頂骨の上に残つているか……」(六〇六頁)と答える。

このように、自分が呉一郎であるとは思えない時、負傷した頭に痛みを感じたりはしないが、自分が呉一郎かも知れないと思えてきた時には、その瞬間に呉一郎が感じる痛みが自分の痛みとなる。鶴見が述べているように、主人公は「社会から規定されている自分の状態からぬけだす人の立場、社会から、まだ自分を規定されていない者」であり、また、新木が指摘しているように、「状況証拠は全て彼が一郎であることを指し示している」にもかかわらず、「私」は自分が「一郎」であるとは思えない。つまり社会から規定された「私」と、実際の「私」と

の断絶が示されているのである。一方、「私」の父親であるかもしれない正木博士の死にも実は社会的なアイデンティティの虚構性が含まれているのである。

五―二、証明された正木博士の死——名刺による社会規定

『ドグラ・マグラ』においては主人公が自己同一を否定するところにアイデンティティの曖昧さが描かれているが、主人公の父親である可能性がある若林と正木、「M」と「W」という二人の登場人物にもまた、人物像の混同が描かれている。小説の中で「わたし」の記憶と本体が少しずつ明らかにされていく過程で、作品の前半には若林が登場し、遺言書が登場した後では後半に若林と入れ替わるようにして正木が登場する。しかし、若林が登場する前半に正木への言及があり、正木が登場する後半に若林の言及があるため、二人の人物像は混同してしまう。正木と若林という登場人物を考える手がかりとして、両者ともに所持している小道具——名刺及び銀時計を用いることによつて二人の人物像についての検証を行いたい。まずは、名刺の問題について考えてみよう。

正木が主人公の前から「小使が開け放しておいた扉の縁につかまりながらフラフラと室を出て行った」(七三三頁)きり、行方をくらまず。「四囲はシンとしている。正木博士が引返してくるような音も聞えぬ」(七三七頁)まま姿を消してしまう。その後、主人公が一度その場から離れてから、もう一度書類の入

った風呂敷を開けた途端、もともとはなかったはずの一枚の古ぼけた新聞の号外が見える。

その中の「狂人を模倣した／気味悪い屍体」と題する記事においては、「海岸に漂着している一個の奇妙な溺死体を発見し、この旨箱崎署に届出たので万田部長、光川巡査が出張して取り調べたところ、懐中の名刺により正木博士であることが判明した」（七六八頁）とある。しかし、正木が呉一郎の精神鑑定のために福岡地方裁判所の応接室で刑事の取り調べを受けることになり、刑事が正木博士に名刺を渡した際には、「正木博士は立ち上がって二人の名刺を受取ると、いかにも気軽そうにペコペコと頭を下げ」「私が、お召しによって罷出（おろし）でました正木で……あいにく名刺を持ちませんが……」（五五七頁）とある。名刺を持ち歩かない正木博士が、死体の身元確認の際に、「名刺により正木博士である」ことが判明するのは矛盾を含んだアポリアである。そして極め付きはMの署名の入った官製端書（はがき）である。

| |
|---------------------------|
| 面目ない |
| S先生と酒を飲んだのも僕、た生まれ変わって遣り直す |
| 悴と嫁の将来を頼む |
| 廿日午後一時 |
| W兄 足下 |
| Mより |

この官製端書（七七二頁）は容易に、若林の名刺を思い起こ

させる。若林が初めて登場するシーンにおいて「それは身長六尺を超えるかと思われる巨人（おとこ）であった。顔が馬のように長く、皮膚の色は瀬戸物のように生白かった。薄く、長く引いた眉の下に、鯨のような眼が小さく並んで、その中にヨボヨボの老人が、または瀕死の病人みたいな、青白い瞳が、力なくドンヨリと曇っていた」（七二二頁）とあるが、主人公が若林の親切そうな声を聞いて、「ホッと溜息をしいしい顔を上げると、そのわたしの鼻の先へ」（一七四頁）、次のような名刺が差し出される。

| | |
|-------------|-------|
| 九州帝国大学法医学教授 | 若林鏡太郎 |
| 医学部 長 | |

そしてその後、次のような文章が続く。

うやうやしく一葉の名刺を差出しながら、紳士はまだ咳き入った。（中略）
この名刺を二、三度くり返して読み直したわたしは、またも唾然（つば）となった。目の前に咳嗽（せき）を抑えて突立っている巨大な紳士の姿をモウ一度、見上げ、見下さずにはいられなかった。（中略）

わたしは返事ができなかつた。やはりポカンと口を開い

たまま、白痴のように目を白黒さして、鼻の先の巨大な顎を見上げていた……ように思う。

……これが驚かすにはいられようか。わたしは今朝から、まるで自分の名前の幽霊に付きまといられているようなものではないか。(二七四〜二七六頁)

この描写以外に自分の「名前の幽霊」が登場する箇所がもう一つある。若林が「わたし」に、自分の仕事が「あなたが過去の記憶を回復」「御自身のお名前を思い出」(二七八頁)すことを手助けすることなのだと言った後に、「わたし」は「私の名前の幽霊が、後光を輝かしながら、どこかそこから現れて来そうなの気が」(二七八頁)する。

笠崎の水族館の裏の海辺で身元不明の変死体が発見され、懐中に入っていた名刺から、正木博士であることが判明する。しかし、正木博士は普段、名刺を持ち歩いていなかったはずであった。その後、M署名(正木博士のものだと思われる)の遺言書だと思われる端書が発見され、正木博士が斎藤教授の死と何らかの関連があったために投身自殺をしたのだと思わせるような文面がそこに残されている。しかし、この小説の中ではそもそも一度も正木博士の名刺が登場する場面はなく、そのかわりに正木博士とは正反対に描かれた登場人物である若林博士の初登場のシーンでは、若林博士の名刺が登場する。ここでは若林が現われるのに先立って、名刺が登場する。

大学のお仕着せを着た四十恰好の頭を分けた小使が、**一葉の名刺**を持って入って来て、うやうやしく正木博士の前に捧げました。

扉の閉まった音で眼を醒ました正木博士は、その**名刺**を受取ってチョッと見ますと、いかにも不機嫌らしく老眼を凹ませました。

「ナアーンだ。なんべん言って聞かせてもわからない唐変木だ。馬鹿丁寧にもほどがある。これから、こんなものをいちいち持つて来なくても、黙って勝手に入って来いと、そう言え」

と言いながら、その名刺を大卓子の上に投げ出しました。

(中略)

ところへ、青いメリンスの風呂敷を一個、大切そうに抱えた若林博士が、**長大なフロック姿を音もなく運んで入って来まして**(後略)(四五九〜四六〇頁)

このように、正木博士のアイデンティティは名刺によって規定されるが、若林博士の名刺が登場することによって、正木博士の名刺が不在であることが強調される。そのため、正木博士の名刺と遺言書らしい官製端書の真偽は疑わしくなるのである。一方、宮沢賢治「ネネムの伝記」及び後に改作された「グスコンプドリの伝記」においても、名刺によって生じる主人公のアイデンティティの齟齬が描かれている。

五十三、宮沢賢治作品における名刺の問題

「ネネムの伝記」においては、世界裁判長になったネネムが町の巡視をしている際に世界警察長官邸の前を通り過ぎる。警察長はネネムを、「立つて案内し」、「新聞のくらゐある名刺を出してひろげてネネムに恭々しくよこし」（『校本 第七巻』三二八頁）てくれる。ネネムはすぐにこの警察長こそが、先日、百姓のおかみさんが探していた息子であることに気づく。一方、「ネネムの伝記」の次の改作にあたる「グスコンブドリの伝記」では、主人公グスコンブドリは、前述したように、老技師から名刺を渡され、「ブドリはこわごわ名刺をとって見ますとイーハトーヴ火山局技師ベンネネムと書いてありました。ブドリはぎくつとし」（『校本 第十巻』五一頁）て、驚く。このグスコンブドリの驚きは、「ベンネネネム」という老技師の名前が前作の主人公である「ベンネネネネネネネネネ」に似た名前であるために生じている。このように、ここではグスコンブドリがベンネネネネネネネネネ・ネネムと同一人物であることが暗示されているのである。ここで『ドグラ・マグラ』の主人公が若林博士の名刺を見せられた場面を想起してみよう。「わたしは返事ができなかつた。やはりポカんと口を開いたまま、白痴のように目を白黒さして、鼻の先の巨大な顎を見上げていた」「わたしは今朝から、まるで自分の名前の幽霊に付きまとわれているようなものではないか」という場面において、「わたし」は若林博士の名刺に書かれてある名前を見て、「自分の名前の

幽霊」に付き纏われているように感じて驚いてしまう。ここで「わたし」が「若林博士」と同一人物であることを暗示する描写は、「グスコンブドリ」が「ベンネネネネネネネネネ・ネネム」と同一人物であることを暗示する描写と極めてよく似ており、両作品の主人公がともに一枚の名刺によって自己のアイデンティティを想起させられると言える。

賢治作品においては、名刺、端書、紹介状といった自分のアイデンティティを示す小道具が数多く登場する。たとえば「どんぐりと山猫」における、ある夕方に「山ねこ」から一郎の家に届いた一枚の「おかしなはがき」（『校本 第十一巻』九頁）や、「銀河鉄道の夜」におけるジョバンニの持っている銀河鉄道の切符がそうである。ジョバンニの切符は「四つに折ったはがきぐらゐの大きさの緑いろの紙」（『校本 第十巻』一四九頁）であり、「ほんたうの天上へさへ行ける切符だ。天上どこぢやない、どこでも勝手にあるける通行券」で「こんな不完全な幻想第四次の銀河鉄道なんか、どこまでも行ける筈でさあ」（『校本 第十巻』一五〇頁）という、どこにでも行ける「証明書」のような紙きれである。また、前述したように「ネネムの伝記」においては、世界警察長クエクの持っている「新聞のくらゐある名刺」が登場する。ネネムが大学校に一日通って、卒業試験に合格した後、フウフキイボウ博士が「わしの名刺に向ふの番地に書いてやるから、そこへすぐ今夜行きなさい」（『校本 第七巻』三〇六頁）と言って、名刺を上げる代わりに、ネネムの胸に「セム二十二号」と書いてくれる。これによってネネムは一躍、ばけもの世

界の世界裁判長になったのである。賢治作品において、名刺、葉書などは主人公に「どこでも勝手にあるける通行券」や「世界裁判長」になるような権力を与える「証明書」のようなものである。また、「名刺」によって、世界警察長が、ネネムが人違いをされた失踪中のクエクであることが証明されたり、グスコンドリが前作の主人公「ペンネンネンネン・ネネム」を想起したりしており、「名刺」は自己認識の装置として描かれている。しかし、ペンネンネム老技師の名刺を見て、主人公が驚く場面が次の改作「グスコンドリの伝記」には踏襲されておらず、老技師が主人公のグスコンドリに名刺を差し出し、そこには主人公の驚く姿が描かれていないのである。

六、「黒衣の巨人」 若林博士と銀時計

『ドグラ・マグラ』において最大の争点となっているのは「時間のずれ」の問題である。小説の中にはもう一つの小説『ドグラ・マグラ』が存在し、それは「当科の主任の正木先生が亡くなられますと間もなく、やはりこの付属病室に収容されております一人の若い大学生の患者が、一気呵成に書き上げ」(二三〇頁)たものであった。つまり、一九日に呉一郎が例の発作を起こした後に、正木博士が「空前絶後の遺言書」を残して投身自殺をし、それから一郎が一週間不眠不休で自分自身をモデルにしたテクストを書き上げたのである。しかし、この小説が始まる冒頭部の時間が「わたし」の目覚めた一〇月二〇日であった

ことから、小説内部に流れている「現在」の時間は一〇月二〇日であるはずだが、一九日に自殺してしまっただけで済むはずの小説を翌日に読まされたり、一郎が一週間で書き上げるはずの小説の書類の入った風呂包の内容なみについても、「わたし」が一時的に興奮状態に陥って病院の外に逃げ出し、再度病院に戻ったとき、「僅かの間に、あんなに埃がたまるはずはない」(七六〇頁)と、書類が誰にも動かされた形跡がないことに驚く。また、「わたし」が読んだ正木博士の遺言書は「今朝まではインキが乾いて間もない、青々としたペンの痕跡あとに見えたのが、今はスツカリ黒くなって、行と行との間には黄色い黴かみさえ付いているよう」に見え、「どう見ても二日や三日前に書いたものとは思えない」(七六二頁)。このように、小説の内部に流れている時間が一ヶ月程ずれているのだが、時間のずれとともに時間を計る「時計」も高い頻度で登場する。「わたし」が冒頭で目覚めた「七号室」の外に「人間の背丈ぐらいの柱時計」(二〇一頁)があり、それが小説の冒頭において主人公の眼を覚ました「ブウンン」と唸る音を出したものの正体であった。また、「わたし」が色々な書類を見せられた精神病科本館の部屋の中には「二尺以上もあるうかと思われる丸型の大時計」(二二七頁)や「電子時計」のほかに、「わたし」自身が腕に付けている「腕時計」も登場している。そして最も疑わしく描かれている時計としては、正木博士の「銀時計」を挙げる事ができるだろう。

呉一郎が大正一三年三月二六日に起こした直方事件におい

て、MにもWにも「現場不在証明」があることが説明された場面では、「Mは、久方ぶりでこの大学の門を潜って、当時、精神病学教授として存命中であった斎藤博士初め、同窓や旧知の先輩、後輩に面会した後、総長に会って論文を提出して、卒業以来預けていた銀時計を受け取っている」(六九二頁)とある。

ここに登場する銀時計とは「いや、そのことだよ。実は面目ない話だがね。二、三週間前に門司駅の改札口で今まで持っていた金側時計を掏摸にしてやられてしまったのだ。モバド会社の特製で時価千円くらいのモノだったのが惜しいことをしたよ。そこでヒョイツと思いついて、十八年前にお預けにしておいた銀時計がもしあるならばと思つて貰いに来た訳だがね」(三六二頁)とあるように、正木博士がかつて若林に預けたものであり、正木博士は直方事件において、その銀時計を現場不在証明として利用しているのだ。しかし、この銀時計は何故か小説の前半部分の、若林の登場しているシーンにおいて何度も登場している。

左手で胴衣のポケットをかい探つて、大きな銀時計の懐中時計を取り出して、掌の上にのせた。それからその左の手頸に、右の指先をソツと当てて、七時三十分を示している文字板をのぞき込みながら、自身の脈拍を計りはじめたのであつた。

身体の悪い若林博士は、毎朝この時分になると、こうして脈を取つてみるのが習慣になつてゐるのかもしれないなかつた。(二二七、二八頁)

(中略)すると若林博士も、ちよつと脈拍の診察を終わつたところらしく、左掌の上の懐中時計を、やおら旧のポケットの中に落とし込みながら、今朝、一番最初に会つた時のとおりの丁寧な態度に帰つた。(二二〇頁)

小説の前半部分では若林博士が「銀時計」を度々取り出しては時間を見るシーンがあるが、一方で小説の後半部分では正木博士が会話の中で「銀時計」について言及するシーンがある。その銀時計は前半部分で若林博士が正木博士を追懐する叙述の中にも登場する「卒業以来預けていた銀時計」である。

また、銀時計と言えば、夏目漱石の『虞美人草』(朝日新聞)明治四〇年六月一〇日まで連載が連想される。「銀時計」は、明治三二年から大正七年まで天皇から東京帝国大学の優等生へと恩賜として授けられたものである(『漱石全集 第四巻』(岩波書店、平成六年三月)注釈、四七四頁)。登場人物の一人である小野が、「考へずに進んで行く。進んで行つたら陛下から銀時計を賜はつた」⁽²⁹⁾と言つてゐるように、小野も銀時計組の一人である。悲劇のヒロインとして描かれる藤尾が父親から受け継いだ「金時計」を自分と一緒に男にあげようと思つてゐる⁽³⁰⁾ように、「金時計」はこの作品において父親、つまり一家の長の象徴として用いられてゐた。

『ドグラ・マグラ』の、正木が所持している銀時計もまた、天皇から恩賜として与えられたものであつた。

「若林の談話、（頼注）卒業論文中の第一位に推されることになつたので」（こ）さいます。

……が……こうして評判に評判を重ね、医学部の卒業式の当日になりますと、意外にも、恩賜の銀時計を拝受すべき当人の正木医学士が、いつのまにか行方不明になっていることが発見されまして、またも人々を驚かしました」（二五七頁）

正木は卒業式に参加しなかつたので、「恩賜の銀時計は迷惑ながら当分お手もとに御保管願いたい」（二五九頁）と言ひ、同級生の若林が保管することになる。一八年後、直方事件の日に、正木が急に若林の寮の前に現れ、預けていた銀時計を受け取りに来た。そして「申すまでもなく保管してありました時計は、すぐに下付されることにな」（二六二頁）つた。漱石『虞美人草』及び久作『ドグラ・マグラ』における銀時計の描写にはもう一つの共通点がある。それは両者に銀時計のみならず、「鎖」についての描写があることである。『虞美人草』では、「掌より滑る鎖が、やおら畳に落ちんとして、一尺の長さに喰ひ留められると、余る力を横に抜いて、端につけた柘榴石（ガキネット）の飾りと共に、長いものがふらりくくと二三度揺れる」（『漱石全集 第四巻』四三頁）とあるが、『ドグラ・マグラ』においては、若林が初めて登場するシーンで、「贅沢なものらしい黒茶色の毛皮の外套を着て、その間から揺らめく白金色のたくましい時計の鎖」（二七

三頁）が見える。このように、『ドグラ・マグラ』に登場する「銀時計」は『虞美人草』の「金時計」を意識して書かれたものではないかと考えられる。

「わたし」の父親である可能性があるため、父親的な登場人物として二人とも「銀時計」を所持しているのが興味深い。そもそも正木と若林はこの小説の中では常に対照的に描かれているが、二人とも呉一郎の父親なのかもしれない父性的な登場人物である。前述したように、若林博士が初めて登場するシーンにおいては、「それは身長六尺を超えるかと思われる巨（おおとこ）人であつた」（二七二頁）とある。また、呉モヨ子の死体紛失事件において、若林は「黒怪人物」（四三七頁）や「黒衣の巨人」（四五〇頁）として描かれ、身寄りのない少女の虐殺死体と呉モヨ子の遺体を入れ替える隠蔽工作をし、いつもとは違う「悪魔の形相」（四五七頁）を見せる。つまり、若林には二つの顔があり、ここでは主人公が好きな作家として挙げられているステイヴンソン「ジキル博士とハイド氏」、ホーソン「ヤング・グッドマン・ブラウン」（『Young Goodman Brown』1839）のように、登場人物の二つの側面が描かれているのである。一方で、若林と違って正木は矮小で醜い男性として描かれている。

ところへ、青いメリンスの風呂敷を一個、大切そうに抱えた若林博士が、長大なフロック姿を音もなく運んで入つて来まして、正木博士と向い合つた小さな廻転椅子に腰をかけたました。矮小な正木博士が、大きな椅子の中へ（パイ）にハ

ダカッているのにたいして、巨大な若林博士が、小さな椅子の中にうやうやしく畏まつている風景は、いよいよ絶好の漫画材料でございませう。(四六〇頁)

『ドグラ・マグラ』における「心理遺伝論付録」の談話の中で、主人公は「ぼくは明治四十年の末に、東京の近くの駒沢村で生まれたのだそうです。父のことは何も知」(四七二頁)らしいと言っているが、正木博士の「天然色、浮出し、発声映画」(三九七頁)に登場する呉一郎の精神鑑定調書においては次のようにある。

「そのオジサンを知っているかね、きみは……」

(中略)その時に呉一郎の唇がムズムズと動いた。

「……知っています。ぼくのお父さんです」

(中略)

「アーツハツハツハツハツ。どうも驚いたな。それじゃき

みのお父さんは二人もいるわけだね」

(中略)

今まで異様な緊張味に囚われていた人々が一時に笑い出した。やつとこのことで、もとの表情を回復していた若林博士も、変に泣きそうな、剛ばった笑い方をした。(五五九、五六〇頁)

若林はいつも陰鬱な表情を見せたり、体が弱く、「身体に釣

り合わない、女みたいな声」(二七四頁)を出したりしているが、正木は「快活な、若々しい余韻」(五六九、五七〇頁)のある声の持ち主で常に陽気で「アツハツハツハツハツ」と笑う人物として描かれている。まさに陰が若林なら陽は正木である。また、若林の描写では「左掌の上の懐中時計」(二二〇頁)や「左の頬」「左の手」(二四二頁)「例の異様な微笑を左の目の下に瘻^{うづ}穿らせ」(二五八頁)るとあり、若林は「左」の人物として描かれている。

賢治作品において時計が登場する頻度が最も高い作品として「銀河鉄道の夜」を挙げることができる。「時計屋の店」の時計や白鳥停車場の前にある大きな時計、銀河鉄道の車内にある時計、そして最も代表的なものとしては、カムパネルラの父親が時計を見つめながら、「もう駄目です。落ちてから四十五分たちましたから」(『校本 第十巻』一七〇頁)と河に落ちたカムパネルラが助からないことを宣告するシーンに登場する時計を挙げるができるだろう。そして、賢治の銀時計と言えば、「父よ父よなどで舎監の前にして大なる銀の時計を捲きし」(明治四二年四月、『校本 第一巻』一〇〇頁)という、父親が富を見せびらかすことを批判する内容の短歌が思い起こされる。

賢治作品では、カムパネルラの父親の場合のように、「父親」と「時計」がセットになつて描かれている。そして賢治童話に登場する父親は黒い影として描かれていることが多い。前述したカムパネルラの父親においても「黒い服を着てまっすぐに立つて右手に取形をじつと見つめてゐた」(二七〇頁)とある。童

話「ひかりの素足」において、「お父さんがまつ黒に見えながら入って来た」(二七一頁)とあるように、ここでの父親もやはり黒い影として描かれている。しかもこの作品の中で、「まつ黒に」見える父親は、後に主人公である一郎とその弟の樗夫の雪の中で遭難する事件の不吉な伏線として読み取れることもできる。このように、黒い影と時計をセットにして父親を描いているところを夢野久作と宮沢賢治作品の共通点として指摘することができるのだが、その父親は若林博士が「変に泣きそうな、剛ばった笑い方を」しているように、常に怪しく不確かな存在で、悲しい雰囲気を伴って描かれている。

また、『ドグラ・マグラ』においては、時間のずれに伴って、様々な時計が登場するが、「名刺」の場合と同じように、正木と若林の二人がともに所持している銀時計は、二人が同一人物かもしれないと読者に思わせるための小道具として用いられている。銀時計のほかに、この小説においては、時間をめぐる描写が繰り返し登場するが、時間の流れに注目して読んでみると、作品内に流れている時間が直線的に進んでいるのではなく、逆行したり反復したりしていることがわかる。主人公が絵巻物の空白部分を異様だと感じる場面においては、自分自身が身に付けている腕時計と室内にある電子時計を見比べる描写が二度も登場する。

……まだなんにも気づかれずに残っている意外千万あるものがこの絵巻物のどこかに潜んでいそうな一種の靈感に

満たされつつ、手早く絵巻物の紐を解いた。そのついでに腕時計を見ると、ちょうど十二時十分前である。正面の電氣時計は十一分前であるが、これはもう長い針がXの字のところへ飛ぼうとしている間際かもしれない。(傍点原文)(七四四頁)

またも、何者かに追いかけられているような予感が出て、チヨット腕時計と電氣時計を見較べた。どちらも十二時に四分前である。(七四九頁)

右の引用から主人公の腕時計の時間と室内の電子時計の時間が少しずつ一致してきていることがわかる。また、両方の時間が一致していることを確認した主人公が「絵巻物を頭のほうから、逆に巻き込み」(七四五頁)ながら読んでいるように、時間の逆流が暗示されている。そして、主人公が調査書類を開いてみる二度目の場面においては、「それは大正十五年の十月二十日……正面の壁のカレンダーが示す斎藤博士の命日の翌日」(七六三頁)とあるように、今日一日の自分の行動が一ヶ月前の出来事を反復していることに気づく。

……そうした出来事を一ヶ月後の今日になって、わたしはまた、そのとおりの暗示のもとに、寸分違わず正確に繰り返しつつ夢遊してきた(中略)正木博士も、禿頭の小使も、カステラもお茶も、絵巻物も、調査書類も、葉巻の煙も、

みんなわたしの一ヶ月前の記憶の再現にすぎない(七七五頁)

わたしはもつともつと前から……ホントウの「大正十五年の十月二十日」以来、何度も何度も数かぎりなく、同じ夢遊状態を繰返させられていることになるではないか……
……………(七七六頁)

小説が終りに近づくと、冒頭部分と同じように、隣の六号室から「魂切るような甲高い女の声」(七七八頁)が聞こえてきて、そして眼が醒めた時と同じように「……ブウウウ——ン——ン——ン……」という時計の音がすると同時に小説の幕が閉じる。この冒頭部分と結末部分における反復構造が小説内小説『ドグラ・マグラ』の場合⁽³¹⁾とまったく同じものになっている。冒頭部分においては、先に「ブウウウ——」という音がした後、女の叫び声が入るといふ順序になっているが、結末部分ではその逆で、女の叫び声が入った後に「ブウウウ——」という音が入る。つまり、小説の内部の描写が逆の順番で反復しているのである。前述したように、ヘッケルの個体発生説は人類の進化を説いたものだが、逆に人類の退化についての論考にも応用されており、退行を促す薬による変態をテーマにした手塚治虫の漫画『不思議なメルモ』⁽³²⁾がその一例である。このように、『ドグラ・マグラ』の内部における反復は「呉一郎」一家の歴史だけではなく、小説内部に流れている時間にも生じており、テクスト自体

の構造にも時間が進んだり逆に戻ったりする反復の運動があるのである。そしてこの構造では、「AがBであれば、必ずBはAに回帰しうる」ような円環現象ではなく、「AはBであるが、BはAではない」という螺旋現象⁽³³⁾が反復する。『ドグラ・マグラ』においては螺旋現象が反復しているのは時間の流れについてだけではなく、主人公のアイデンティティについても言えることである。つまり主人公の「わたし」は最後の最後になっても「——わたしは何者——という解答を自分自身に与えることができない、(中略)わたしは今朝あの七号室で眼を開いた時と少しも変わらない」(七七七頁)とあるように、自分が「呉一郎」であるというアイデンティティを拒むのである。「わたし」と「呉一郎」が相互に交換不可能であるならば、『ドグラ・マグラ』において描かれている様々な犯行、殺人事件の真犯人も結局のところ、「わたし」、「正木」、「若林」の誰なのかもわからないままに物語が幕を閉じており、まさに正木の書いた書類の中で言うところの「事件は所謂迷宮裏に遺棄さるるに至りたり」(四九三頁)「犯人なき犯罪」(四九三頁)といった言葉で説明できるのである。このような結末の欠如や捜査の失敗を含んだ探偵小説の先駆的なテクストとして、ポーの「群衆の人」(『The Man of the Crowd』: 1840)などを挙げることができるが、『ドグラ・マグラ』の「わたし」の好きな作家の中にポーが含まれているように、既に「幻魔怪奇探偵小説」としてのこの小説には「反探偵小説」⁽³⁴⁾的な性質があるのである。

七、結論

大正生命主義を謳歌した大正モダニズム期に、二人の作家がヘッケルの個体発生論を受容した。宮沢賢治は「ネネムの伝記」において、個体発生を行う「ばけもの」を描いた。夢野久作は『ドグラ・マグラ』の中の論文『胎児の夢』においてヘッケルの論文を下敷きにして、その「万有進化の実況」について書いたのだった。細胞精神の遺伝によつて、呉青秀と呉一郎、そして、呉モヨ子と黛芬姉妹は、一千年以上という長いスパンの間を超えて反復する。登場人物の間で反復する細胞分裂は絶えず過去を再現するが、主人公の「私」はその細胞分裂によつてもたらされた自己同一性を否定する。養老孟司が言うように正木博士がヘッケル主義的に個体発生の因果律を主張するのならば、固有名を持たない主人公の「私」は、因果律に規定されない「自己」を提示するカント主義者である。鶴見俊輔が指摘しているように、主人公は「社会から規定されていない自己」に固執するのだ。一方で、父親かもしれない正木博士は「名刺」によつて暴力的に自己同一性を規定される。しかし、この「名刺」の問題では、若林博士の名刺が登場することによつて正木博士の名刺の信憑性が疑わしくなることが強調される。一方で、同じことが言えるのは正木博士の「銀時計」についてである。銀時計は呉一郎の起した直方事件の際に現場不在証明の物証としても利用されているが、その銀時計が正木博士によつて取り出される場面は描かれていない。その代わりに、体の弱い若

林博士が「わたし」の前でたびたび銀時計を取り出して脈拍を計るシーンが登場する。このように、「名刺」と「銀時計」の存在は、正木博士と若林博士の二人のアイデンティティを揺るがす道具として描かれており、二人の存在の不確かさは読者を混乱に陥らせる。そして、「時計」の問題と同時に浮んでくるのが、作品内に流れている時間の問題である。時間はヘッケルの反復説の場合と同じように、絶えず前へ進んだり逆に戻ったりするが、それは円環的な循環ではなく、螺旋現象になつている。この現象は主人公のアイデンティティの問題においても同じように生じており、「わたし」と「呉一郎」が結局、本当に同じ人物であるかどうかが解明されていないこの作品の構造には、「犯人なき犯罪」というポストモダニズム的な反探偵小説の性格があるのである。

宮沢賢治の場合、「伝記群」においては、絶えざる細胞分裂のように、人違いのエピソードが幾度も登場し、後継作品の主人公グスコンプドリが、先行作品の主人公であるネネムに間違われたりする。しかし、人違いは人違いの問題として片づけられており、ここには作品間での自己同一性に断絶がもたらされている。「グスコンプドリの伝記」においても、『ドグラ・マグラ』と同じように名刺によつて自己同一性の確認が行われており、名刺のエピソードをとおして主人公と前の作品の主人公との間にアイデンティティの齟齬が生じている。しかし、この箇所は雑誌に発表された「グスコンプドリの伝記」においては踏襲されておらず、このような形で主人公のアイデンティティの

問題が取り扱われるのは草稿段階までである。

同時代の二人の作家には、ヘッケルの受容や時間の反復や逆行、そして自己との断絶という共通するテーマがあったのである。

※ 本稿における『ドグラ・マグラ』の引用はすべて『日本探偵小説全集4 夢野久作集』（東京創元社、昭和五九年一月）によるものである。

※ 本稿では、宮沢賢治に関する本文、年譜、校異などの引用は全て『校本 宮沢賢治全集』（筑摩書房、昭和四八〜五二年）に拠る。引用に際しては『校本 巻号』と略記する。

※ 文献などの年時表記は、日本における時代感覚の把握の上から、便宜的に元号を用いた。また、傍線、傍点、太字などは断りのない限り、全て論者（頼）が施したものである。

【注記】

- 1 鈴木貞美「一九一〇年代の思潮と「生命」の氾濫」（『文藝 特集・大正生命主義 第三二巻第三号、平成四年八月』二五一頁）
- 2 阿毛久芳「賢治の心象素描」（同注1、「文藝 特集・大正生命主義」）三〇三頁
- 3 養老孟司『ドグラ・マグラ』の科学——脳・発生・進化・遺伝と時間』（『ユリイカ』第二二巻第一号、青土社、平成元年一月）一九〇頁
- 4 現在現存している宮沢賢治の「伝記群」として称されている作品や草稿については以下のようになっている。①小説「ベンネンネンネンネン・ネムの伝記」（大正一〇、一一年成立と推定）。②どの作品にも転用され

なかった八枚の清書稿書き損じ断片。③主人公が「ネム」という人物を作品にする「ネムの伝記」。④「グスコンプドリの伝記」に先立つ改作の試みの一端を示した創作「ノルデ」のメモ一枚（箇条書きで、一二個の項目がある）。⑤ GERIEF 印手帳のメモ。⑥小説「グスコンプドリの伝記」（昭和六年に成立と推定）。⑦小説「グスコンプドリの伝記」（『児童文学』第二冊（文教書院、昭和七年三月））。

5 山田兼士「ベンネンブドリの肖像」（『宮沢賢治・第八号』洋々社、昭和三年一月）七七頁（傍点原文）

6 押野武志「ネム、グスコンプドリ、グスコープドリの「伝記」群」（『国文学解釈と教材の研究 宮沢賢治の作品——《visions》あるいは《群》として読む』第四一巻七号、平成八年六月）三四〜三五頁

7 「あたかも太古の生物の遺骸が、石油となって地層の底に残っているように、あの呉一郎の底に隠れ伝わっていた祖先の一念は、この絵巻物を見てゾッとすると同時に点火されたんだ。（中略）過去も、現在も、未来も、日月星辰の光もことごとくその大光明に掻き消されてしまつて、自分自身が呉青秀と同じ心理……（中略）呉青秀の熱烈な欲求そのものを全身の細胞に喚び起した、ある青年の記憶力、判断力、習慣性などの残骸に過ぎなかったのだ（中略）否、二人の行動に現われた心理の推移を精神病的に観察してみると、呉一郎は、一千年後の呉青秀に相違ないのだ」（六四七頁）

8 鶴見俊輔「ドグラ・マグラの世界」（初出は「思想の科学」昭和三七年一〇月号）。本稿における引用は『夢野久作の世界』（沖積舎、平成三年一月、一四〇頁）によるものである。

9 由良君美「自然状態と脳髓地獄」（初出「国文学」昭和四五年八月号）。

本稿における引用は同注8、『夢野久作の世界』(三四九頁)によるものである。

- 10 新木安利「夢野久作の夢魔」(『宮沢賢治の冒険』海鳥社、平成八年九月) 二九〇頁
- 11 同注8、鶴見、一四六頁
- 12 オフラ・ブライトバッハ(エルンスト・ヘッケル『生物の驚異的な形』戸田裕之訳、河出書房新社、平成二年四月) 八頁
- 13 Haeckel/Naturliche Schöpfungsgeschichte. Berner1898, S. 82. 本稿の引用は嶋崎「ヘッケルとエコロジ」(『自然との共生の夢』鳥影社・ログス企画部、平成一四年二月)によるものである。一一七〜一八頁
- 14 小野隆祥「青森挽歌」とヘッケル博士(三木卓他『群像 日本』の作家) 12 宮沢賢治』小学館、平成二年一〇月) 二七二頁
- 15 廣井敏男、富樫裕「日本における進化論の受容と展開——丘浅次郎の場合——」(『人文自然科学論集』第129号、東京経済大学人文自然科学研究会、平成二二年二月) 一八三頁
- 16 小倉豊文「賢治の読んだ本」(『日本文学研究資料新集26 宮沢賢治・童話の宇宙』有精堂、平成二年二月) 二〇二頁
- 17 小野隆祥「利那滅を超えて」(『宮沢賢治の思索と信仰』泰流社、昭和五年一月)において、賢治は「大正二年、秋、丘浅次郎の『進化論講話』を熱心に読む。また、ヘッケルの『生命之不可思議』を読んだか、島地大等とこれらの問題で対談」(一六二頁)したと指摘している。
- 18 「その時正木博士が提出されました論文こそ、ダーウィンの『種の起源』や、アインスタインの『相対性原理』と同様……否、それ以上に世界の学界を震撼させるであろうと斎藤先生が予言されました『脳髓論』であ

ったのです」(二六二頁)

- 19 谷本誠剛「ペンネンネンネン・ネネムの伝記」——パロディとおぼけの世界」(『宮沢賢治とファンタジー童話』北星堂書店、平成九年八月) 一〇一頁
- 20 Haeckel/Generelle Morphologie der Organismen. Bd. 2, S. 6. 本稿の引用は嶋崎(同注13、四四頁)によるものである。ちなみに『宇宙の謎』における個体発生の翻訳については「個體發生はその種族發生を反復したるものにして唯その短く且つ急速なるものなり、而して之を決定するは遺傳と順應との生理作用なり」(エルンスト・ヘッケル『人間の種族發生學』(岡上梁、高橋正熊訳『宇宙の謎』有朋館、明治三九年三月、一三二頁)とある。
- 21 久作の死後に、長男、杉山龍丸が出版した『夢野久作の日記』(葦書房、昭和五年九月)において、昭和一〇年二月一四日に「(上略) 熱海に十二字着。両親に会ふ。(中略) 汝は俺の死後、日本無敵の赤い主義者となるや計られずと仰せらる。全く痛み入る。中らずと雖遠からず。修養足らざるが故に看破された也」(三八三頁)とある。
- 22 同注20、ヘッケル「精神の種族發生學」(『宇宙の謎』) 四七頁
- 23 『校本 第六卷』一〇〇頁。昭和二年三月二八日に詠まれたものと推定される。
- 24 同注20、ヘッケル「本質法則」(『宇宙の謎』) 一九二頁
- 25 「……このドグラ・マグラという言葉は、維新前後までは切支丹^{キリシタン}パチン^{パチン}連の使う幻魔術のことを言った長崎地方の方言だそうで、ただ今では単に手品とか、トリックとかいう意味にしか使われていない一種の魔語同様の言葉だそうです。語源、系統などは、まだ判明致しませんが、しい

て訳しますれば、今の幻魔術もしくは『堂廻目眩』『戸惑面喰』と
いう字を当てて、おなじように『ドグラ・マグラ』と読ませてよろし
いというお話ですが、いずれにしましてもそのような意味の全部を引っ
くるめたような言葉には相違ございません。(二三五頁)

26 同注20、ヘッケル「精神の個體發生學」(『宇宙の謎』)二二七頁

27 同注12、オフラ・ブライトバツハ『生物の驚異的な形』二九頁

28 呉一郎が開けた巻物の中に描かれている死美人図のモデルについては
「ソックリそのままあの六号室の寝姿を写生したものと思われな
いではないか……」(六四二頁)、「……と」(六四三頁)とある。
恐ろしいように、肉体の遺伝も恐ろしいものなんだ。姪の浜の「農家の
娘、呉モヨ子の目鼻立ちが、今から一千百余年、唐の玄宗皇帝の御代
に大評判であった花清宮裡の双映姉妹に生き写しなうていうことは、造
化の神でも忘れていたろうじゃないか」(六四三頁)とある。

29 本稿における『虞美人草』の本文引用はすべて『漱石全集 第四卷』(岩
波書店、平成六年三月)によるものである。六七頁

30 「ぢや、まあ、止よませう」と藤尾は再び立つて小野さんの胸から金
時計を外して仕舞った」(同注29、『漱石全集 第四卷』四四頁)

31 小説内小説『ドグラ・マグラ』については、「一番最初の第一行が……

プウウウ——ン——ン……という片仮名の行列から始まっている
ようであるが、最終の一行が、やはり……プウウウ——ン——ン……
……という同じ片仮名の行列で終わっている」(二三〇頁)とある。

32 同注13、嶋崎『自然との共生の夢』五〇頁

33 菅原孝雄「密室に懸架した螺旋階段——『ドグラ・マグラ』への初級的
接近」(初出「現代詩手帖」昭和四五年五月号)。本稿における引用は同
注8、『夢野久作の世界』によるものである。三三四〜三六五頁

34 “The main difference that separates postmodernism from modernism, then, is
postmodernism's lack of a center, its refusal to posit a unifying system.
Postmodernism's new awareness is the absence of a finality, a solution. This is
exactly what the anti-detective novel is about.” (さういっわけ、ポストモ
ダニズムをモダニズムと分かつ主な差異は、ポストモダニズムに中心が
なく、一つの統一化するシステムを置くことを拒否していることにある。

ポストモダニズムの新しい認識とは、結末や解決の不在なのだ。この「
」とはまさに「反探偵小説について言えることなのであ(る)。(Stefano Tanzi,
The Doomed Detective: The Contribution of the Detective Novel to Postmodern
American and Italian Fiction. Carbondale: Southern Illinois UP, 1984. 39-40)
(九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程三年)